

安来市雲樹寺、『千才池』伝承の検討

—後背湿地の形成とその利用例—

永見 英*¹・中村唯史*²・徳岡隆夫*²

Geological confirmation of the oral history of the existence of Pond Senzai
in front of Unjuji Temple in Yasugi City, Shimane Prefecture

—An example of formation of back marsh and its utilization—

Ei NAGAMI, Tadashi NAKAMURA and Takao TOKUOKA

はじめに

安来市の雲樹寺は山門が国の重要文化財に指定されるなど、歴史ある禅宗の寺である。雲樹寺の南に面する後背湿地に、かつて『千才池』と呼ばれる池が存在し、鎌倉時代末の雲樹寺の建立に際して谷奥の丘陵を切り開いて池の水を尾根を隔てた隣の谷に流したという口承が伝わっている。また、谷奥には切り通しが実在し、現在も農業用水路として使用されている。雲樹寺の南に面した後背湿地は北東から南西に開いた小さな谷の谷底平野で、その出口は南から北流する伯太川の堤防によって遮られている。堤防は伯太川の自然堤防上に構築されており、堤防構築以前も自然堤防が谷の出口を塞ぐ形で存在した。

県道安来布部線の改良工事に伴い、安来市教育委員会によって雲樹寺周辺の遺跡発掘調査が行われ、あわせて、切り通し構築の意義の検討と雲樹寺建立にまつわる口承の確認を

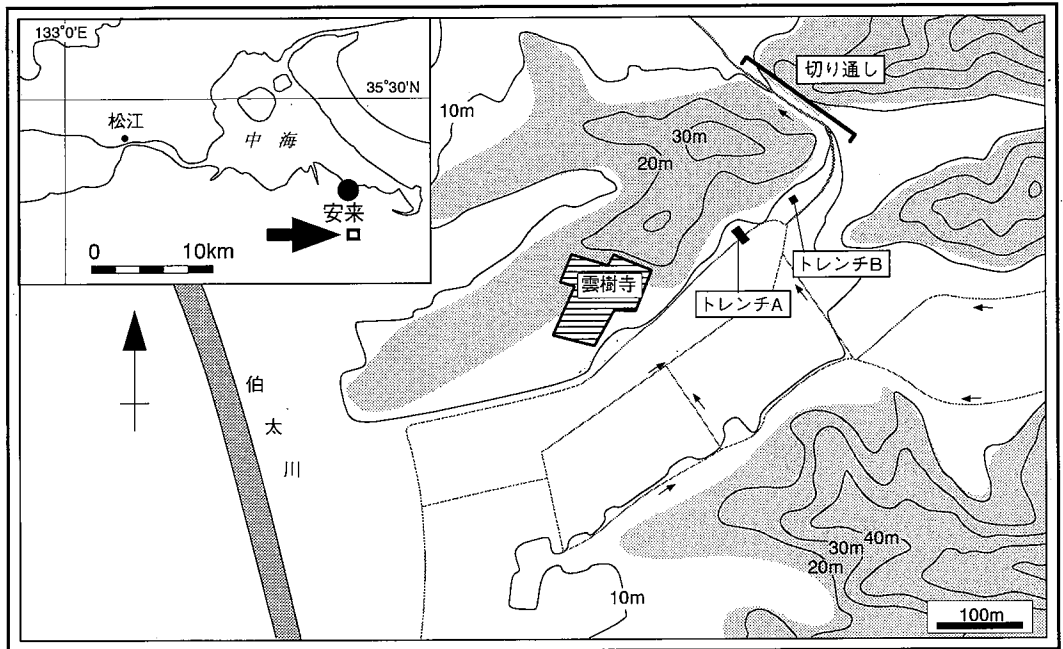
目的に、トレンチ調査を行い、『千才池』についての検討を行うことになった。安来市教育委員会においては、この調査を永見が担当することになり、自然科学的調査の必要があることから、島根大学の徳岡に協力依頼がなされた。この研究報告はそのまとめである。なお、自然科学的調査は主に中村が行なった。

調査地周辺の概要

調査を行ったのは、島根県安来市南東部にある雲樹寺周辺である(第1図)。北東から南西に伸びる尾根の末端に雲樹寺が立地する。雲樹寺の南側の谷には現在水田が広がっている。この水田地帯には、かつて『千才池』と呼ばれる池があったといわれており、現在も湿地である。この谷の奥に、幅約13m、長さ約50mにわたって尾根が掘削され、切り通しが造られ、現在も農業用水路として利用されている。切り通しは尾根の鞍部を利用して構築されている。構築時期は不明である。雲樹寺南側の谷の出口に当たる位置を伯太川が流れ、谷の出口は伯太川の自然堤防で閉塞され

* 1 安来市教育委員会

* 2 島根大学総合理工学部地球資源環境学教室



第1図 調査地域

網かけ部は丘陵 矢印は谷内水路の流向を示す

た形になっている。そのため、第1図中に矢印で示したように、水は谷底平野の農業用水路を巡って谷奥へ向かい、切り通しを経て、隣の谷へ導かれている。

雲樹寺の歴史と口承

雲樹寺は、瑞塔山天長雲樹聖禪寺という。雲樹寺を開祖した孤峰覚妙は会津に生まれ、7歳で剃髪し、比叡山で台密を学び、後に禅に入った。応長元年(1311年)に渡元し、約10年間留まった。帰国後、能登永光寺の螢山紹瑾(曹洞宗中興の祖)のもとを訪ね、曹洞宗を探った。その後、出雲能義郡宇賀荘に留まり、鎌倉時代末期の元亨2年(1322年)に雲樹寺を建立した。

寺伝によれば、この地の豪族、牧新左衛門入道善興が宅地を施入したという。牧新左衛

門入道善興の署判が加えられた、寺領を示した得図が雲樹寺に所蔵されている。また、重要文化財や美術品のほかに2758冊の典籍が所蔵されており、寛文年間(1661-1673年)に臨済宗妙心寺派となり、専門道場となっていたものと考えられる。文政3年(1820年)に大火によって山門を残し消失したが、再建され現在に至っている。

雲樹寺の周辺地域には雲樹寺建立にまつわる口承がいくつか残されている。ここでは、雲樹寺と切り通しに関わる二つの口承を紹介する。一つは、雲樹寺を建立するため、尾根を切り通して『千才池』の水を抜いたと伝えられるものである。『千才池』の水を、尾根を挟んで隣の谷にあった『万才池』に流し、水がなくなったため、『千才池』に住んでいた大蛇は切り通しを抜け、北の峠を越えて逃げた。大蛇は豪族の牧新左衛門のいわば守り神で

あったのだが、大蛇がいなくなったため、牧新左衛門は没落したというものである。もう一つは、瑞光山清水寺と清井町周辺に伝わるもので、雲樹寺の東側の高尾山(標高101m)から望むと、雲樹寺や清水寺が立地する丘陵が亀の姿に見えることから、清水寺は亀の背に、雲樹寺は亀の頭に乗ると例えられていたが、切り通しによって亀の頭が切られてしまった^{註1)}、という内容である。

トレンチ調査

調査は、雲樹寺の東側に当たる地点で行った。谷は調査地点の東で分岐しており、調査地点に近い北側の枝谷に切り通しがある。南側の谷が集水域が広く、主谷にあたる。

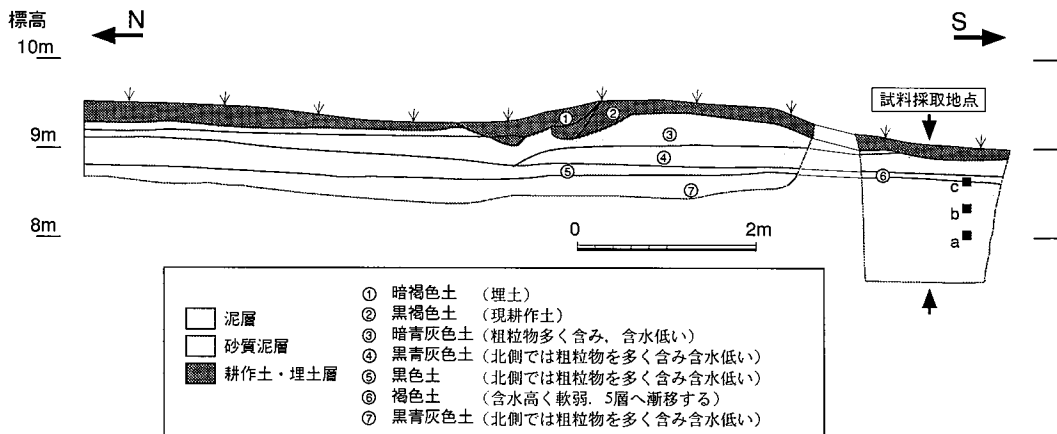
遺跡の存在確認のために丘陵に沿って数地点で試掘トレンチ調査を行い、そこからは古墳時代以降、近世までの墓が検出されている。『千才池』の確認を目的としたトレンチは第1図中のトレンチA、トレンチBの2地点で行った。トレンチA地点の現在の地表標高は約9mで、谷底平野の中で最も標高が低い地

点である。トレンチAは遺物が出土した試掘トレンチに連続する形で掘削した。

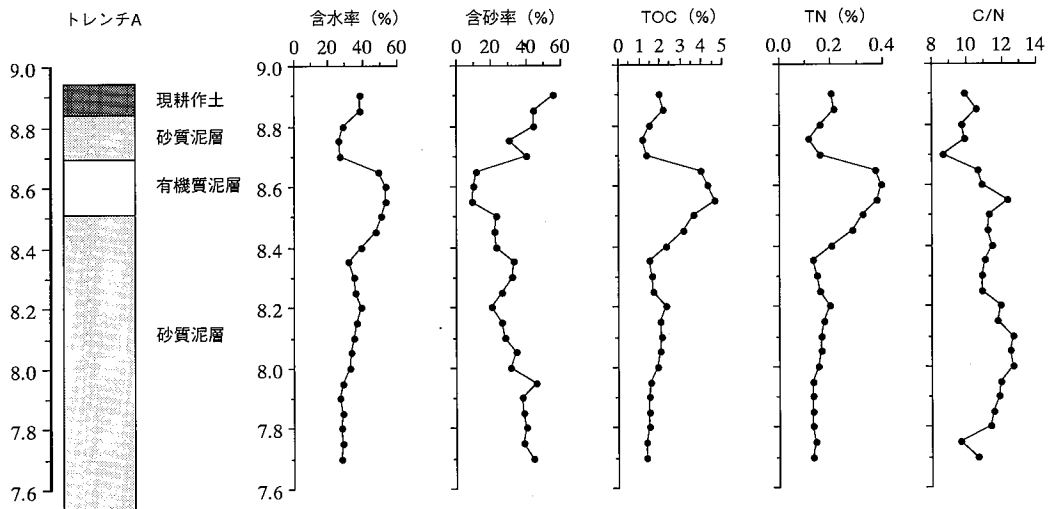
層 序

トレンチAでは後背の丘陵から直接もたらされたと思われる、礫を含み、固くしまった礫混じり砂質泥層が北から南へ低くなる地形を構成して堆積する。この中に後述するように、古墳時代から近世の遺物が含まれる。地層は南側へ層相が漸移し、トレンチ南部では礫をほとんど含まず、含水の高い砂質泥層になる。砂質泥層の上部に層厚20cmの有機質泥層が挟まれる。有機質泥層は含水が高く軟弱な地層である(第2図)。

トレンチBではトレンチ下部に極粗粒砂～粗粒砂を含み、やや含水が高い砂質泥層がある。この上に礫を含みややしまりのよい礫混じり泥層が重なる。礫混じり泥層は不規則なブロック状の構造があり、埋土の可能性もある。トレンチBでは軟弱な有機質泥層は挟まれない。



第2図 トレンチA地層スケッチ



第3図 堆積層の分析結果

試料の採取と分析

トレンチAの壁面から、鉛直方向に5cmおきに厚さ2cmの試料を採取し、含水率、含砂率、全有機炭素量(TOC)、全窒素量(TN)C/N比を求めた。結果を第3図に示す。

・含水率と含砂率

含水率と含砂率についてみると、含水率は、7.70mから8.35mでは30~40%であり変化がなく、8.40mから次第に上方へ大きくなり、8.60mで最も高い。8.65mと8.70mの間で大きな変化がありこれより上部では値が小さい。含砂率は最下部から8.50mまでは次第に小さくなる傾向があり、8.55mから8.65mの間では10%前後の特に小さい値を示す。これより上部では値が大きくなり、上方へ大きくなる傾向がある。含水率は堆積物の間隙率と関係があり、一般に堆積物の粒度が大きくなると間隙率が小さくなり、それに伴い含水率が小さくなる。ここでは、含砂率と含水率に逆の対応が認められ、含水率は粒度の変化に対応しているとみられる。

・全有機炭素量と全窒素量

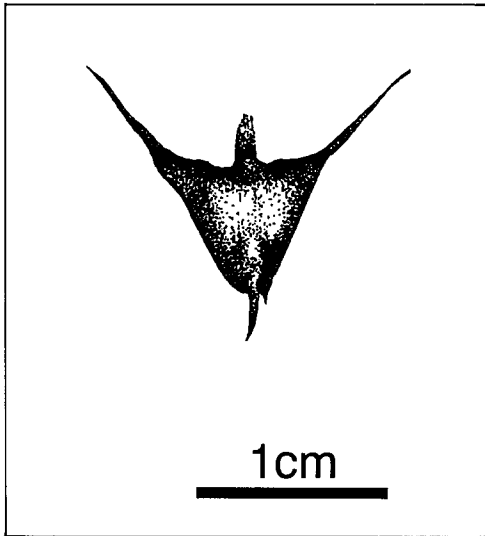
有機炭素の起源はおもに高等植物に由来し、全窒素量はおもにプランクトンに由来する有機窒素と、碎屑物中に含まれる無機体の窒素からなる。堆積物中の有機炭素と全窒素の量は、供給量と堆積後の分解の程度によって決まり、両者の比は有機物の起源と関わりがあることから、堆積環境を示す指標として用いることができる。

TOCをみると7.70mから8.35mでは1.5~2.0%であり変化がなく、8.40mから次第に上方へ大きくなり、8.55mで最も高い。8.65mと8.70mの間で大きな変化があり、これより上部では値が小さい。TNをみると、TOCときわめてよく似た傾向を示し、7.70mから8.35mでは0.15~0.20%であり変化がなく、8.40mから次第に上方へ大きくなり、8.60mで最も高い。8.65mと8.70mの間で大きな変化があり、これより上部では値が小さい。次に、TOCとTNの比であるC/N比をみると、概ね、10から13までの値を示し、TOC、TNが高くなる8.50mから8.80mの層準でも目立つ

た変化は認められず、有機物の起源にはほとんど変化がないことを示す。

ヒシの実化石の産出

第2図に示したa, b, cの3層準から堆積層を10cm²ずつ採取し、含まれる植物化石を観察した。a, bには草本類の根や葉の破片が含まれる。cからは草本類の根や葉の破片とともに、ヒメヒシの種子が6個体産出した(第4図)。ヒメヒシはヒシ科の水生植物で湖沼や河川の流れが遅く、水深が比較的小さい水域に生える。



第4図 ヒメヒシ化石スケッチ

堆積環境の推定

含水比、含砂率、TOC、TNの変化の傾向はよく対応する。7.70mから8.35mではいずれも変化が小さいが、8.35mより上部で含水率、TOC、TNは増加、含砂率は減少し、8.55mから8.65mの間に含水率、TOC、TNは最も高い値を示し、含砂率は最も低い値を示す。そし

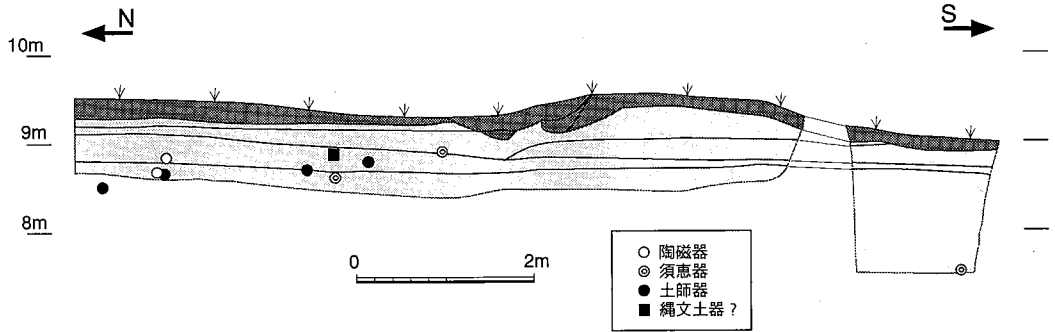
て8.65mと8.70mの間で値が大きく変化することはすべてに共通する。

含砂率の変化は碎屑物の運搬営力の変化を示している可能性が高い。トレンチAの地点では、はじめ粗粒砂を運搬しうる程度の水流が碎屑物をもたらしたが、次第に水流の影響が及びにくい環境に変化し、水に浮遊して運ばれる細粒物しかもたらされない環境に変化した。この環境はあるとき、急速にもとの水流の影響を受ける環境に変化した。TOCとTNの変化は有機物の供給量の変化などいくつかの可能性はあるが、ここでは、含砂率の傾向と調和的であり、C/N比はあまり変化していないことから、堆積速度の変化によって、無機の碎屑物と有機物の相対的な量比が変化し、見かけ上、TOCとTNが増加したと考えられる。これらのことから、各分析値の変化は堆積環境の変化を反映していると考えられる。

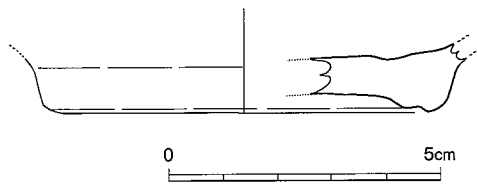
粗粒物もたらされず、堆積速度が遅くなったと考えられる、8.50mから8.80mの層準はヒメヒシの種子が産出する層準でもあり、この層準の環境は湖沼であったと考えられる。すなわち、この層準が口承として伝わる『千才池』の堆積層である可能性が高いといえる。有機質泥層の層厚は20cmで、湖沼が存在した期間は短いと考えられる。また、湖沼の環境はある時急速に変化し、それ以前と同じ環境に戻ったと考えられる。

遺物からみた堆積時期

トレンチAから出土した遺物の出土層準を第5図に示す。湖沼堆積層とみられる有機質泥層中からは飾り柱とみられる木材が出土したが、堆積時期を示すものは得られなかった。有機質泥層より下位の砂質泥層からは古墳時



第5図 遺物出土層準



第6図 磁器皿の高台

代とみられる須恵器が出土した。トレンチ北側からは相当量の遺物が出土した。有機質泥層より下位にあたる層準から出土した遺物のうち、最も新しいものは唐津のものとみられる磁器皿の高台（第6図）で、17世紀代のものである可能性が高く^{註2)}、少なくとも雲樹寺建立の鎌倉時代末までさかのぼることはない。このことから、湖沼が存在した時期は、雲樹寺建立より後の時代と考えられる。

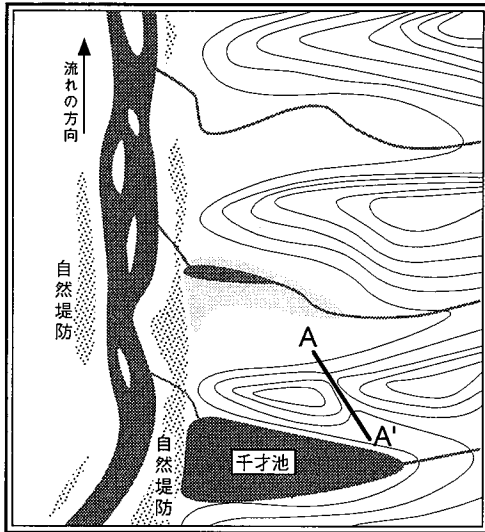
考 察

トレンチ調査の結果、湖沼堆積層とみられる層準が確認され、遺物から湖沼の存在した時期は17世紀以降であると考えられる。この時期は雲樹寺が建立された時期より新しく、雲樹寺の建立に際して『千才池』の水を切り通しを作ることで『万才池』に流したという口承と時期が一致しない。

伯太川の上流では近世に「かな流し」による砂鉄採取が大規模に行われ、伯太川の下流域に多量の碎屑物がもたらされた。その影響で自然堤防が発達し、谷の出口が塞がれ、湖沼が形成されたとすると、湖沼堆積層の堆積時期と矛盾しない。したがって、切り通しは、「かな流し」の影響で伯太川の自然堤防が高くなり、谷から流れた水が出口を塞がれ、湖沼化したために水稻生産に支障が生じ、その排水のために構築されたと考えるのが妥当である。

堆積物の分析から、湖沼の環境は急速にそれ以前と同様の環境に戻ったと考えられ、切り通しの構築によって湖沼の水を抜いた場合にはこのような急速な環境変化が起こると考えられる。この点では口承は事実を伝えていられると考えられ、後になって雲樹寺建立と切り通し構築の二つの大きな事柄が一つになって伝わったのではないかと考えられる。

『千才池』の形成と、切り通しの構築は、後背湿地の形成とそこにおける土地利用の一つの典型といえる。碎屑物の供給量が多い河川に面して開いた谷は、河川の自然堤防の発達が少ない時は、谷奥と出口の比高差によって下刻作用が卓越する。河川の自然堤防が高く発達するに伴い、比高差が小さくなり、谷



第7図 千才池形成の模式図

伯太川に面した小谷の環境は自然堤防の発達によって変化した。自然堤防が谷底の高さより低い段階(図上段)では谷は乾いた状態にある。自然堤防が高くなるに伴い、谷の水はけが悪くなり、湿地化する(図中段)。さらに自然堤防が高くなると、池が形成される(図下段)。自然堤防を切り開いて水路を作っても、伯太川の河床が高くなっており、池の水を抜くことはできない。千才池の場合、丘陵の鞍部があり(A-A')、ここを利用して水路を作り、池の水は隣の谷に排水することができた。

底平野は水はけの悪い環境に変化する。この段階の谷底平野は水稻耕作に適した環境といえる。さらに、自然堤防が高くなり、出口を塞ぎ止める形になると、谷底の水は逃げ場を失い、湖沼が形成される。この段階が『千才池』ということになる(第7図)。地権者にとっては水田が失われることになり、また、周囲の家屋は洪水の被害を受け易くなる。そこで、湖沼の水を抜くことが考えられるが、自然堤防が高くなり、天井河川になっている段階では、自然堤防を切って排水路を作ることは不可能である。『千才池』では幸いにも尾根に鞍部があり、ここを掘り下げることで比較的容易に切り通しを構築することができたと考えられる。また、伯太川の自然堤防発達の背景には、上流における「かんな流し」の影響があったと考えられ、『千才池』伝承は自然環境と人間の生業活動の関わりを示す貴重な資料といえる。

注1) 安来市清水町、前田久義氏の教示による。

注2) 広瀬町教育委員会の竹中 哲氏の教示による。

文 献

島根県教育委員会、1988：雲樹寺所蔵歴史資料調査報告書。

